
夕暮れの時続編

クルーガー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夕暮れの時続編

【Nコード】

N8799B

【作者名】

クルーガー

【あらすじ】

付き合い始めていつものようにお泊りに来た蜜。なのに慎二は急にバイトに行ってしまう。それに不思議がる蜜がとつた行動は？

（前書き）

ボーイズラブです。嫌いな方は見ないでください。

高宮蜜は今、宮原慎二のうちにお泊りしに来ている。だけど慎二はいない。急にバイトが入ったから。時刻は午後6時。慎二が行って5時間そろそろ終わる位か。

しかし慎二も今日は蜜が泊まりに来るって知つといてバイト入れるなんて酷い。いつもなら断わるのに何故だか今日は違った。何かあるのだろうか？蜜は慎二に内緒でバイト先に向かう。慎二にばれないようにカウンターから見えない位置で慎二を見た。

『かつこいいなあ。』蜜は思わずみとれてしまった。
すると慎二の後ろからかわいい女の子が現れ2人で仲良く喋り始めた。

『かわいいなあ。でもなんだかイライラする。早く離れてよ。』

蜜は胸がモヤモヤする感覚に襲われた。 『もしかして俺嫉妬してるのかなあ。』

普段蜜と慎二はバイトが同じ日でもあまり話さず仕事をしている。

なのにあの子とはずっと話しっぱなしだ。

蜜はいたたまれなくなつて慎二の家ではなく自分の家に帰ってしまった。そしてふと思う。

『うちにあんな子いたっけ？』

もしかしたら入ったばかりだから俺とはまだシフトが一緒じゃないんだ。よし。あの子と一緒になつたら絶対仲良くして探りを入れよう。蜜は決心した。

その日はそんなに遠くなかった。

決心した日から3日後に一緒になつたのだ。

『名字は…山下か。下の名前は何なんだろう。名札って名字しか書いてないからなあ。』

んゝ直接本人から聞いた方が早いかな。

蜜は山下さんの方へ向かい声をかける。

「はじめまして。高宮蜜です。君は？」

山下さんは大きな目をこちらに向けて答える。

「あ、俺の名前は山下純です。よろしくお願いします。」

「よろしく」

蜜は笑顔で返しながらも山下さんが実は男だったという事に本当にびっくりした。

『そんなかわいい顔して男かよ！絶対神様が間違えて余計なモンくつつけたに違いない。』

それに山下が男だった事は蜜にとって女以上に厄介だ。それは慎二がゲイだから…。

『もしかして慎二俺よりこいつの事が好きなのかも。あゝイライラする。』

とりあえず蜜は山下に優しく仕事を教えながら内心毒舌をはいていた。今日慎二の家に行ってさりげなく山下の事聞いてみるか。

蜜はバイトが終わり速攻で着替え慎二の家に行った。

インターホンを押し慎二が出てくるのを待つ。

しかしなかなか出てこない。

蜜はこのまま帰るか迷った。

もしかしたらコンビ二行ってるだけかも知れない。

そして早く帰って来いと思いながら待つ。

その後起きることなんて思ってもみなかった。慎二と山下が現れたのだ。そして慎二は蜜を見つけると、

「蜜、こんなところでなにしてんの？この前勝手に帰っただろ。心配したんだぞ。」

と、呆れ顔で見てる。隣の山下は蜜がここにいることを不思議がっていた。蜜は泣きそうになった。

『なんでこいつがいんだよッ！』

蜜は絶対に涙を見せまいと2人の間をすり抜けて走って帰った。そして家のドアを開け母親の文句を聞かず自分の部屋に鍵をかけ誰

も入って来ないようにしベッドの中で思いつきり泣いた。思えば最初は確かに慎二の方が蜜のことを好きだった。でもいつの間にか蜜は自分でも気づかないうちに慎二から離れなくなってしまったのだ。そう思うと余計に苦しくなった。

蜜はその日泣き疲れて寝た。

朝。憂鬱な日がやってきた。体が重い。とりあえず起きて洗面所に向かう。ふと自分の顔を見ると目が赤くなり瞼は腫れていた。

『すっげえ顔。ヤバいな、こんなこと初めてじゃん。今日は休もう。どうせ出席とらない講義だし。』

そんなわけでベッドに戻り再び眠りについた。

夢の中で慎二が出てきて蜜に微笑みながら近寄って来る。蜜は嬉しくて手をふる。しかし慎二は蜜を素通りしてしまった。そして振り返るとそこには山下がいた。2人は手を繋ぎ歩いて行く。突然真っ暗になり蜜は自分が消えたような感じがした。

そこで目が覚めて泣いたことに気付いた。

『もう泣きはたしたと思ったのに…』

時刻はすでに午後4時。

昼を食べてなかったの下に降り台所で袋ラーメンを作って食べた。正直味なんてわからなかった。食器を洗いリビングでぼーっとしているとインターホンがなった。

『誰？こんな顔で出たくないし居留守つかお。』

しかし一向になり止まない。それどころか酷くなっている。さすがに折れて受話器で応答することにした。

『どちら様ですか？』

「蜜ッ話がある。入れてくれないか？」 慎二の声だ。

蜜は一瞬驚いたが慎二の頼みを受け入れた。そして玄関の鍵を開けドアを開ける。

すると慎二が蜜の体を捉え、そのまま強く抱きしめた。

「痛いよ。放して。」 慎二はハッとして放す。

「で、話って何？俺忙しいんだよね。」

「いつも暇って言うてるくせに…」 慎二は苦笑を浮かべ言葉を続ける。

「蜜さ、勘違いしてる。」

実はあの時蜜が俺のこと見てるの見てたんだよ。

最初はわかんなかったけど蜜の態度とか昨日の反応で気付いた。だから今日は誤解を解こうと思って来たんだ。」

「誤解って別に俺は何にも思っていないよ。」蜜は強がって反論した。

「怒るよ。あのなあ、純は俺の従兄弟なんだよ。わかる？従兄弟。で、純のおばさんから純が初めての日はよろしくって頼まれたの。」

昨日は蜜を迎えに行こうとしたらまたま純と会ってバイトで渡す資料があったから俺の家まで来たわけ。それ以上はないよ。俺の大切な人は蜜だけ。」そう言って慎二は蜜にキスをした。

蜜は慎二の真剣な顔を見て自分の愚かさにも呆れてしまった。そして頭の中でぐるぐる回っているうちにベッドに横たわっていた。いつもながら慎二の早業には驚かされる。

気がつくとも服は一枚も着てない。一気に恥ずかしさがおそってくる。いつの間にか慎二も裸になっていて蜜にさっきのキスとは違う深いキスをしてきた。蜜も一生懸命それに応える。

久しぶりのセックスは蜜を震えさせ慎二は何度も蜜をなだめ、2人とも疲れるまで愛し合った。蜜は疲労感を感じながらも幸せに浸っている。隣に愛すべき人が居て手を伸ばせば届くのだ。

しかしちよつとでもどちらかがその愛を疑えば、関係はぎくしゃくしてしまふ。お互いの信頼こそが鍵だ。蜜は今回のことで自分の新たな気持ちに気づきやつぱり自分には慎二が必要だし、2人の絆が強くなったと確信した。

その後蜜の父親が帰って来て、慎二は2人が付き合っていることを話し、殴られた。まだ認められてないけどきつとわかってくれるさ、

と慎二は蜜に微笑んだ。

（後書き）

続編書いちゃいました（汗）ほんとのはあのシーン詳しく書きたかったです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8799b/>

夕暮れの時続編

2010年10月11日00時28分発行